### ⑹　昆虫類　① ハチ目

埼玉県のハチ目昆虫は、これまでに 43 科 1,151 種が記録されている。

本書を刊行するにあたり、記録されている 1,151 種から外来種や迷入種などを除いた 1,143 種を対象に、本県における生息状況を調査した結果、その約 6％にあたる 16 科 63 種をレッドリスト掲載種とした。

これまでのハチ目昆虫の掲載種数の変遷をみると、初版 55 種（全 936 種中 5.9%）、改訂版の 65 種（全 1,069 種中 6.1%）、前版での 62 種（全 1,126 種中 5.5%）、そして本書の 63 種（全 1,151 種中 5.5%）と、絶滅を危惧すべき状況にあるハチ類は増減が見られるが、これは、継続的な調査の中で、生息地の発見や減少などが認められたためである。前版の VU から今回ランク外としたチャイロスズメバチ（スズメバチ科）や、同じく VU から NT2 へとランクダウンしたオオハラナガツチバチのように新たな生息が県内各地で確認されたようなものもあるが、リストされた多くの種において安定した生息環境が守られているものは少ない。

県内ですでに採集されている未同定種は、少なくとも既知種の 1.5 倍にはなると推定される。未同定種の多くはハバチ上科、ヒメバチ科、コマユバチ科、コバチ上科などである。しかし、ハチ目については県全域での調査が進んでいるとは言い難い。調査が比較的進んでいるのは低山帯から台地・丘陵帯で、山地がこれに次ぎ、低地が最も遅れている。市町村史など地域ごとのまとまった調査結果を見ると、各地で確認された種数は、山地である旧小鹿野町（現小鹿野町の一部）279 種、台地～丘陵・山地にあたる小川町 461 種、寄居町 383 種、旧児玉町 373 種、旧神泉村 218 種（いずれも現本庄市）、日高市 100 種、台地と低地に当たる幸手市 192 種、北本市 176 種、鶴ヶ島市 161 種、戸田市 115 種、松伏町 48 種である。調査年や調査規模、時期や調査員、各自治体面積など地形的要素以外の条件が異なるため、単純に比較できないが上述の傾向は伺うことができる。

埼玉県は本州のほぼ中央に位置し、ハチ目昆虫に関しては、南方系の種と北方系の両方の種が認められる。アカオビケラトリバチやフジジガバチなど、埼玉県に北限の記録があるものは、限られた数年間に渡って見られたのみである。これらが分布拡大のパイオニア的な存在なのか、移入によるものかはわからない。今のところ定着していないと考えられるが、古い記録のものもあり、昨今の気温上昇も含めて考えると、今後の侵入定着について注視する必要がある。

次に、県内のハチ相に関わる環境の特徴や変化について地帯区分ごとに述べる。

標高 1,600m を超える亜高山帯は、県内で占める面積は少ないものの、そこだけに生息する種が見られる。アギトギングチ、タイセツギングチ、ニッコウツヤアナバチ、ミズホハムシドロバチ、ヤドリスズメバチ、ヤドリホオナガスズメバチなど、他にもハバチや、東京都・山梨県・長野県との都県境の花畑のみで確認されている高山性のナガマルハナバチなどの記録がある。この地域は秩父甲斐多摩国立公園の特別保護地域に指定されているため、開発は厳しく規制されるが、ニホンジカの個体群密度の高まりが顕著で、奥秩父部の幾つかの地域では採食による植生へ

の強度の影響が知られる（埼玉県，2005, 2011）。都県境尾根付近にあった花畑の喪失や、幾つかの地域で林床の裸地化や植生の単純化が報告されており、これらがハチ類の生息に与える影響は大きいと言える。中でも、マルハナバチのような社会性のハナバチ類は、数ヶ月に及ぶ営巣期間の末期に繁殖虫を生産するが、活動期間中途切れることなく花の供給を必要とするため、植生の単純化は影響を受けやすい。今回、新たにリスト入りしたナガマルハナバチは、以上のような理由から危急種であると思われるが、近年の情報がなく「情報不足」とした。同地域に生息するオオマルハナバチなども同様の可能性が考えられるが、山地帯にまで分布していることや調査で生息確認されたことから、今回は掲載を見合わせた。

山地帯ではアナバチ類が多く採集されているが、山林の伐採や人手不足による林床の荒廃などで減少傾向が見られる。中でも、朽木に営巣するギングチバチの減少が大きい。山地には、コブヨコバイバチ、ワモンイスカバチ、ツヤエナシエンモンバチ、アイヌギングチ、サッポロギングチ、ササキリギングチ、ヘロスギングチ等に加え、カラフトクロオオアリ、ヒメマルハナバチ、ミヤママルハナバチなど特有のハチ類もあげられる。

台地・丘陵帯では低地帯と併せて開発が進んでいるところが多く、人の生活と関係を持つハチが多い。茨城県（2016）で指摘されているとおり、人と生活圏が重なる地域ではアシナガバチなどが駆除の対象となり、減少が見られる。古い社寺の柱に空いた穿孔性甲虫類の脱出口や、垣根などの竹、カヤぶき屋根のカヤの穴は、ドロバチ類や、ジガバチモドキ類などの多くの種が利用し、それらに寄生するセイボウ類の生息環境としても重要である。歴史のある広い神社などは環境が比較的安定するが、小さな神社では周辺の草地や森林などそれらのハチ類の餌場となる通称『狩場』が荒れたり、逆に開発されたりすることもカリバチ類減少の要因となる。この地帯では地面に穴を掘るハナバチ類やその寄生者であるヤドリコハナバチ、キマダラハナバチなども多く見られる。また、ハナバチ類には集団営巣をするものがあり、営巣地が限定される種は、開発などで営巣地が失われる心配もある。

最後に、カリバチ類の生息環境として重要な河川環境について述べる。埼玉県（2011）によると、県内の河川はダムによる流量調整の影響で、河川敷が撹乱されにくくなり、川原草地が樹林化している。河川敷の砂地は多くのカリバチ類の営巣場所で、周辺草地は狩場であることから樹林化が進むとカリバチ類への影響があると考えられる。

［付記］次ページ以降の種ごとの解説において、形態や国内分布に関する項目は、寺山・須田（2016）、日本産アリ類データベースグループ（2003）、多田内・村尾（2014）、木野田・高見澤・伊藤（2013）を参照した。

科　名　アナバチ科
〔和　名〕 **フジジガバチ**
〔学　名〕 *Ammophila clavus japonica* Kohl

埼玉県(2018)　EX　環境省(2015)　NT
指定状況　－

【形　態】 体長メス 30 ～ 35mm、オス 25 ～ 30mm。サトジガバチに似るが、メスは腹部第 1・2 節の大部分と脚が赤褐色。

【国内分布】 本州、四国、九州

【主な生息環境】 低山地の草原、裸地。

【県内での生息状況】 1930 年に寄居町、1937 年と 1939 年にさいたま市（旧大宮市）で記録されたが、その後全く記録されていない。

【特記事項】 南方系で、南西諸島に多い。埼玉県は北限の記録と思われる。ガ類幼虫を狩り、地面に掘った穴に運び入れる。埼玉県では上述以降、記録が得られていないため絶滅したと考えられる。

科　名　ギングチバチ科
〔和　名〕 **アカオビケラトリバチ**
〔学　名〕 *Larra* (*Larra*) *amplipennis* (Smith)

埼玉県(2018)　EX　環境省(2015)　NT
指定状況　－

【形　態】 体長 16 ～ 18mm、黒色で腹部第 1 節から 3 節が赤褐色。

【国内分布】 北海道、本州、四国、九州、南西諸島

【主な生息環境】 海岸や河原の砂地など、獲物となるケラのいる所や、成虫の餌となる甘露を分泌するアブラムシが付いている葉の付近に見られる。

【県内での生息状況】 1969 年に寄居町で 2 頭が発見されたのみで、その後の記録はない。

【特記事項】 ケラを一時麻酔し、卵を産み付ける。幼虫はケラの体液を吸収して成長する。河川敷の整備などでケラのいる砂地が減少することが、本種の生存の脅威となる。南方系の種であり、福井県が分布の北限となっている。

科　名　ギングチバチ科
〔和　名〕 **サクラトゲアナバチ**
〔学　名〕 *Oxybelus lewisi* Cameron

埼玉県(2018)　EX　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　態】 体長 5 ～ 7mm、黒色で腹部第 1 ～ 4 背板に横紋対がある。

【国内分布】 北海道、本州

【主な生息環境】 河川敷や海岸などの砂地を営巣場所とする。ハエを狩り、砂地に掘った穴に運び込むとされている。本州では京都府、福井県、新潟県、石川県、埼玉県から記録されている。

【県内での生息状況】 1930 年に寄居町桜沢の荒川岸でメス 1 頭が採集され、その標本をもとに記載された。その 1 個体が採集されているだけである。

【特記事項】 河川敷や自然堤防など砂の裸地があり、付随した自然環境があることが本種の生存にとって重要である。現在、確実な生息が確認されているのは福井県の三里浜だけとなっている。改訂版での和名はルイストゲムネアナバチ。

科　名　フシダカバチ科
〔和　名〕 **マエダテツチスガリ**
〔学　名〕 *Cerceris pedetes* Kohl

埼玉県(2018)　EX　環境省(2015)　NT
指定状況　－

【形　態】 体長メス約 17mm、オス 12 ～ 14mm、メスの頭盾の突起は前方に大きく突き出る。

【国内分布】 北海道、本州

【主な生息環境】 低山地から海岸付近まで分布し、裸地や砂地に穴を掘って営巣すると考えられている。生態が未知であるため、餌を含めた生息環境は不明である。同属にはハナバチ、ハムシ、ゾウムシのいずれも成虫を狩るグループがある。

【県内での生息状況】 1937 年に‘秩父’でメス 1 頭が採集されているだけである。秩父山地での記録と思われる。

【特記事項】 他県ランク　福井県 : 絶滅危惧 I 類、青森県 : 情報不足

科　名　アシブトコバチ科
〔和　名〕**ナンブアシブトコバチ**
〔学　名〕*Brachymeria porthetrialis* Josephdran et Joy

埼玉県(2018) CR　環境省(2015) –
指定状況 –

【形　態】体長5mm、キアシブトコバチより少し小型。メスの腿節には1本のトゲがある。

【国内分布】本州

【主な生息環境】寄居町の2ヶ所でしか得られていない。里山環境に生息する。林内の小さな神社に越冬のために集まったと考えられるものが得られている。

【県内での生息状況】これまで得られたのは、1977年から1979年の10月に寄居町五の坪でメス17頭、寄居町三ヶ山でメス1頭だけである。最近ではほとんど見られない。

【特記事項】これまでオスは得られていない。寄生性であるが、寄主を含めた生態は不明。成虫越冬をすると考えられる。里山環境の保全が本種の生息にとって重要と考えられる。

科　名　セイボウ科
〔和　名〕**ムサシトゲセイボウ**
〔学　名〕*Elampus musashinus* (Tsuneki)

埼玉県(2018) CR　環境省(2015) NT
指定状況 –

【形　態】体長3.5～5mm。腹部は丸く、体色は緑色。オスの腹部先端にU字型の凹みと後胸背に突起がある。

【国内分布】本州、九州

【主な生息環境】河川敷の草地。県内でこれまで得られているのは荒川の上流域と下流域で、下流域の戸田市の対岸である東京都板橋区の河川敷でも記録されている。県内で採集された個体は川岸のヨモギにつくアブラムシの甘露をなめにきたと思われる。

【県内での生息状況】1985年に戸田市でオス5頭、2000年に秩父市でメス1頭が採集されたのみである。

【特記事項】海外の同属種では地中営巣性のアナバチ類やギングチバチ類に寄生するものが知られる。

科　名　セイボウ科
〔和　名〕**オオツヤセイボウ**
〔学　名〕*Pseudomalus grandis* (Tsuneki)

埼玉県(2018) CR　環境省(2015) NT
指定状況 –

【形　態】体長7～10mm、日本産セイボウの中では大型。体色は緑色で背面に暗部がある。

【国内分布】北海道、本州、九州

【主な生息環境】里山環境。山間の住宅地付近に生息するが、極めて稀。これまで、埼玉県、栃木県、山梨県から得られている。

【県内での生息状況】1971年に寄居町でメス1頭が採集されたのみである。

【特記事項】アリマキバチ亜科のハチに寄生すると思われるが、寄主を含めた生態は不明である。分布は局地的。近県ランク　栃木県：絶滅危惧ⅠA、群馬県：絶滅。

科　名　クモバチ科（ベッコウバチ科）
〔和　名〕**キマダラズアカクモバチ**
〔学　名〕*Machaerothrix tsushimensis* Yasumatsu

埼玉県(2018) CR　環境省(2015) NT
指定状況 –

【形　態】体長6～9mm、顔面と頭頂部が、暗赤色の微毛に覆われる。顔側面と頭頂の長毛はヘラ状。

【国内分布】本州、対馬

【主な生息環境】山地から得られている。

【県内での生息状況】1988年に小鹿野町と、旧吉田町（現秩父市）の合角ダム流入域の2ヶ所で見つかっているだけである。

【特記事項】県内の2ヶ所ともわずかに発見されているだけで、非常に少なく、次第に見られなくなりつつある。物の隙間に泥でツボを作り、数頭でコロニーをなす習性があるようである。前版での和名はキマダラズアカベッコウ。

科　名　ギングチバチ科
〔和　名〕**コウノスジガバチモドキ**
〔学　名〕*Trypoxylon* (*Trypoxylon*) *konosuense* Tsuneki

埼玉県(2018) CR　環境省(2015) –
指定状況 –

【形　態】体長 9 ～ 13mm、黒く、腹部に赤帯がある。頭盾の先端が少し反り返る点が他種との区別点となる。

【国内分布】本州

【主な生息環境】平地の水田地帯で発見されている。枯れたススキの髄の穴を泥で仕切って巣を作り、クモを狩るため、それらが揃った環境が必要。青森県、宮城県、埼玉県、千葉県から記録される。

【県内での生息状況】鴻巣市で、1961 年と 1962 年にそれぞれメスが 1 頭ずつ採集されているのみで、以降の記録はない。

【特記事項】水田をスイーピングして得られていることから、水田のクモを狩っていると思われる。国内ではメスのみが得られている。

科　名　ギングチバチ科
〔和　名〕**ヤスマツギングチ**
〔学　名〕*Crossocerus* (*Crossocerus*) *yasumatsui* (Tsuneki)

埼玉県(2018) CR　環境省(2015) –
指定状況 –

【形　態】体長 6 ～ 7.5mm、体は黒色で頭盾は通常黄色。前胸背面に 2 紋を持つ。

【国内分布】北海道、本州、四国

【主な生息環境】数県で記録されるのみ。山地で採集されているが、詳細は不明である。

【県内での生息状況】1969 年に中津川渓谷でメス 1 頭が採集されたのみである。

【特記事項】習性は未知である。

科　名　ギングチバチ科
〔和　名〕**ウスキギングチ**
〔学　名〕*Ectemnius* (*Cameronitus*) *flavohirtus* Tsuneki

埼玉県(2018) CR　環境省(2015) –
指定状況 –

【形　態】体長メス 12mm、オス 7.5 ～ 10mm、胸部に黄斑が多く、腹部 2 ～ 4 節に黄斑対がある。黄色毛が多く、頭盾は銀白色毛で覆われる。

【国内分布】本州、九州、南西諸島

【主な生息環境】山地で採集されている。生態は不明だが、条件の良い不朽材が営巣に必要と思われる。

【県内での生息状況】1978 年に旧大滝村（現秩父市）雁坂峠への途中で、柳の木上でメス 1 頭が採集されたのみである。

【特記事項】近年、東京都でも採集されている（高橋 , 2014）。

科　名　ギングチバチ科
〔和　名〕**ナンブツヤバチモドキ**
〔学　名〕*Didineis sibirica* Gussakovskij

埼玉県(2018) CR　環境省(2015) –
指定状況 –

【形　態】体長 7 ～ 8mm、黒色で光沢なし。大顎は褐色、前翅外縁から 1/5 の位置に淡褐色紋が帯状に存在。

【国内分布】本州

【主な生息環境】海岸や河川の近くの砂地に生息する。埼玉県と新潟県からのみ記録されている。稀種であるため、生態は判明していないが、砂地に穴を掘って営巣し、ウンカやヨコバイを狩ると推察される。

【県内での生息状況】1961 年に鴻巣市でオス 1 頭が採集されたのみである。

【特記事項】新潟県で発見された生息地は開発によって失われたとされる。当初は 1968 年に *Alysson sibricus nipponicus* として記載されたが、後に本種のシノニムとされた。
前版での和名はナンブツヤアナバチモドキ。

科　名　ギングチバチ科

〔和　名〕 **ニッポンハナダカバチ**

〔学　名〕 *Bembix nipponica* F. Smith

埼玉県(2018)　CR　環境省(2015)　VU

指定状況　－

【形　態】 体長20～23mm、上唇が伸長するのが和名の由来である。腹が太く、波状の黒帯を持つ。

【国内分布】 北海道、本州、四国、九州

【主な生息環境】 河川敷や自然堤防など、乾燥した砂地。地面に穴を掘って営巣し、大型のアブやハエを狩る。分布は広くとも生息地は限られる。適地には集団で営巣が見られる。河川改修や内陸砂丘の開発などで生息地が減少している。

【県内での生息状況】 1977年に加須市の旧利根川の内陸砂丘で発見され、1995年には羽生市でも採集されている。近年も、個体数は少ないながら生息は確認されていたが、直近の報告はない。

【特記事項】 近県ランク　栃木県・群馬県：絶滅危惧Ⅰ類、茨城県・神奈川県：絶滅危惧Ⅱ類、東京都：準絶滅危惧種。前版ではドロバチモドキ科とされていた。

科　名　フシダカバチ科

〔和　名〕 **ソボツチスガリ**

〔学　名〕 *Cerceris sobo* Yasumatsu et Okabe

埼玉県(2018)　CR　環境省(2015)　－

指定状況　県内希少野生動物種

【形　態】 体長10～15mm、触角が長く、第3/4節はそれぞれの長さが幅のメスで3倍、オスでは2.5倍となる。

【国内分布】 本州、九州

【主な生息環境】 周囲を林に囲まれた神社の床下の乾燥した土の地面に穴を掘って営巣する。営巣地では巣が集団となる。営巣場所は年々移動していく。クチブトゾウムシ類の成虫を狩るため、それらが生息できる環境が必要である。

【県内での生息状況】 1973年に皆野町の神社と旧児玉町（現本庄市）の神社で営巣地が発見された。増減はあるが、営巣を続けている。また、朝霞市でも成虫が得られている。

【特記事項】 2000年に県内希少野生動植物種に指定され、生息地が保護されている。

科　名　ドロバチ科

〔和　名〕 **オオハムシドロバチ**

〔学　名〕 *Symmorphus captivus* (Smith)

埼玉県(2018)　CR　環境省(2015)　DD

指定状況　－

【形　態】 体長メス15mm、オス10.5mm、ハムシドロバチ中で特に大きく、ずんぐり体型と併せて識別が可能。

【国内分布】 本州、四国

【主な生息環境】 これまでの報告からは、平地から山間部の自然林に生息し、朽木や家屋に営巣すると考えられる。ハムシの幼虫を狩ると考えられており、良好な自然環境が必要とされる。

【県内での生息状況】 寄居町、旧児玉町（現本庄市）から、計3頭が得られている。

【特記事項】 採集例が少ない上、観察例がないため習性は未知であるが、近縁種の習性から竹筒などを泥で仕切り、巣を作ると思われる。近県では栃木県で準絶滅危惧に指定されている。

科　名　クモバチ科（ベッコウバチ科）

〔和　名〕 **ヤドリクモバチ**

〔学　名〕 *Irenangelus hikosanus* Wahis

埼玉県(2018)　EN　環境省(2015)　－

指定状況　－

【形　態】 体長8～15mm、ヒメバチに似る。体色は光沢のある黄褐色。

【国内分布】 本州、四国、九州

【主な生息環境】 自然状態が保存されている中高山地から里山環境にかけて得られている。

【県内での生息状況】 旧大滝村（現秩父市）の大血川、旧吉田町（現秩父市）、小鹿野町、旧名栗村（現飯能市）など各地で得られているが少ない。

【特記事項】 他のクモバチ（キバネトゲアシクモバチ）に労働寄生すると考えられている。前版での和名はヤドリベッコウ。

科　名　アリマキバチ科
〔和　名〕 **コブヨコバイバチ**
〔学　名〕 *Mimesa lutaria japonicus* (Perez)

埼玉県(2018) EN　環境省(2015) –
指定状況 –

【形　態】 体長メス 9 ～ 10mm、オス 8mm、頭盾中央に横長のコブ状突起がある。腹柄上部に弱いしわがある。
【国内分布】 北海道、本州、四国
【主な生息環境】 高地で自然状態が保たれた森林が広がるところ。礫の多い路傍の土中に穴を掘って営巣する。
【県内での生息状況】 1973 年に旧大滝村（現秩父市）の神社、1974 年に旧大滝村（現秩父市）の中津川林道で採集された。
【特記事項】 ヨコバイ科の若虫を狩り、地面に掘った穴に運び入れる。北海道では平地でも見られる。前版での和名はコブヨコバイカリ。

科　名　アリマキバチ科
〔和　名〕 **ツヤエナシエンモンバチ**
〔学　名〕 *Spilomena laeviceps* Tsuneki

埼玉県(2018) EN　環境省(2015) –
指定状況 –

【形　態】 体長 2.5 ～ 3.0mm で日本最小の営巣性狩蜂。前翅縁紋が大。腹部第 1 節が柄状にならない。
【国内分布】 本州
【主な生息環境】 高地の日陰の少し湿った神社など。朽木のある場所や古い社寺の柱などであるが、営巣条件が限られるようである。埼玉県と福井県で発見されている。
【県内での生息状況】 1970 年に旧大滝村（現秩父市）の太陽寺で営巣しているところが発見され、1994 年に旧神泉村（現神川町）と皆野町で採集された。
【特記事項】 アザミウマを狩る。巣は朽木の穴に作るが、自ら穿孔するのではなく、借抗性の可能性もあるが巣の記録はない。営巣できる条件にあった建物の減少や高地にある社寺周辺の木の伐採が生存を脅かすと考えられる。前版での和名はツヤエナシエンモン。

科　名　ギングチバチ科
〔和　名〕 **コウライクモカリバチ**
〔学　名〕 *Pison* (*Krombeiniellum*) *koreense* (Radoszkowski)

埼玉県(2018) EN　環境省(2015) DD
指定状況 –

【形　態】 体長 7 ～ 8mm、全身が黒く、大顎が赤褐色。とりわけ腹部のくびれが大きい。
【国内分布】 本州
【主な生息環境】 山地の森林周縁や、林内の明所にある古い神社などの建物を好むようであるが、市街地でも発見されている。
【県内での生息状況】 丘陵から山地にかけて得られている。
【特記事項】 近県ランク　栃木県：絶滅危惧ⅠA、群馬県：絶滅。カニグモを狩る。

科　名　ギングチバチ科
〔和　名〕 **フクイジガバチモドキ**
〔学　名〕 *Trypoxylon* (*Trypoxylon*) *ambigum* Tsuneki

埼玉県(2018) EN　環境省(2015) DD
指定状況 –

【形　態】 体長 5 ～ 7mm、オスはホソジガバチモドキに似るが触角末節が前節より少し短い点で区別される。
【国内分布】 本州
【主な生息環境】 生態は不明。獲物となるクモの種類も不明。昔ながらの管理された里山に生息すると考えられ、他のジガバチモドキと同様に枯れササや、朽木のカミキリ脱出口などに営巣すると推測されるが明らかでない。京都府、福井県、富山県、新潟県、千葉県、埼玉県からのみ記録されている。
【県内での生息状況】 鴻巣市などで数頭が採集されているのみである。
【特記事項】 生態は不明だが、クモを狩り、細い竹筒を泥で仕切って育児室に利用すると考えられる。近県では千葉県で絶滅危惧Ⅰ類に指定されている。

科　名　ギングチバチ科
〔和　名〕**コダマジガバチモドキ**
〔学　名〕*Trypoxylon* (*Trypoxylon*) *kodamanum* Tsuneki

埼玉県(2018)　EN　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　態】体長 6 ～ 7mm、小型で、第 1 腹節が棍棒状。腹部に赤色部を持つ。
【国内分布】本州
【主な生息環境】周囲が木に囲まれて、暗く、湿った所にある古い神社などの建物に開いた虫穴をに営巣する。生息には湿度が必要である。埼玉県からのみ発見されている。
【県内での生息状況】1971 年に旧児玉町（現本庄市）でオスメス各 1 頭､1973 年に皆野町でメス 6 頭オス 2 頭、2001 年に寄居町でメス 2 頭と嵐山町でメス 1 頭がそれぞれ採集されている。
【特記事項】クモを狩り、キクイムシやシバンムシなどが開けた穴に営巣する。

科　名　ギングチバチ科
〔和　名〕**アイヌギングチ**
〔学　名〕*Crossocerus* (*Ainocrabro*) *malaisei* (Gussakovskij)

埼玉県(2018)　EN　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　態】体長 11mm、腹部は黒く、腹部第 3 節に黄斑がある。
【国内分布】北海道、本州、四国
【主な生息環境】ギングチバチ中で本種だけがシリアゲムシの成虫を狩ることから、生息にはシリアゲムシの餌となる小昆虫類が多い湿度のある林縁などがあることが重要とされる。
【県内での生息状況】1970 年に旧大滝村（現秩父市）の大血川渓谷でメス 1 頭､1978 年に旧大滝村（現秩父市）の雁坂峠への登山道でメス 1 頭が採集されたのみで、以降は記録されていない。
【特記事項】全国的にも少なく、朝鮮半島での記録もあるが少ない。*C. aino*（Tsuneki, 1947）は同物異名。

科　名　ギングチバチ科
〔和　名〕**フタツバギングチ**
〔学　名〕*Crossocerus* (*Blepharipus*) *annulipes hokkaidoensis* Tsuneki

埼玉県(2018)　EN　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　態】体長 6 ～ 7mm、全身黒く、大顎と脚付節と脛節の一部が黄色。オスの前肢付節は幅広く扇状となる。
【国内分布】北海道、本州
【主な生息環境】低山地にある朽木に穴を掘り、ヨコバイ科を中心とした同翅半翅類を狩ることから、それらが揃った環境が必要と考えらえる。本州では、栃木県、石川県、福井県などから記録される。
【県内での生息状況】1971 年に旧大滝村（現秩父市）太陽寺でメス 1 頭が採集されているが、その後の追加記録はない。
【特記事項】朽木を掘って作る巣は、分枝した先がさらに分枝する複合分枝となる。複数個体が巣口を共有する場合もある。

科　名　ギングチバチ科
〔和　名〕**ヤノギングチ**
〔学　名〕*Crossocerus* (*Cuphopterus*) *yanoi* (Tsuneki)

埼玉県(2018)　EN　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　態】体長 8 ～ 9.5mm、黒色で、腹部第 3 ～ 4 節に黄色紋を持つ。
【国内分布】北海道、本州、四国
【主な生息環境】習性は知られていないが、丘陵から低山地の立ち枯れの木で採集されていることから、そういった木に穴を掘り、営巣を行うと考えられる。
【県内での生息状況】1972 年に寄居町の寺と秩父市長尾根で採集されているのみである。
【特記事項】

科　名　ギングチバチ科
〔和　名〕 **ササキリギングチ**
〔学　名〕 *Ectemnius* (*Policrabro*) *furuichii* (Iwata)

埼玉県(2018) EN　環境省(2015) NT
指定状況 －

【形　態】 体長メス 12 ～ 14mm、オス 9 ～ 11mm、全身黒色で、第 2 ～ 4 腹節に 1 対の黄斑を持つ。第 4 節の斑は時に消失。

【国内分布】 北海道、本州

【主な生息環境】 山地の落葉広葉樹林に生息し、林床のササにいる直翅類を狩り、林内の枯れ木を利用して営巣する。ただし、福井県では海岸沿いの低地で、北海道では札幌市丸山の麓でも得られている。本種の生存には不朽材や、獲物である直翅類の生息に適した状態の林床を持つ森林が必要となる。

【県内での生息状況】 1973 年に旧大滝村（現秩父市）雁坂峠への登山道でのメス 1 頭が初記録で、小川町から計 3 頭が記録されている。

【特記事項】 ギングチバチ類で直翅類を狩るのは本種のみである。近県ランク　栃木県：準絶滅危惧（C）、群馬県：絶滅危惧Ⅰ類。

科　名　ギングチバチ科
〔和　名〕 **キユビギングチ**
〔学　名〕 *Crossocerus* (*Towada*) *flavitarsus* (Tsuneki)

埼玉県(2018) EN　環境省(2015) DD
指定状況 －

【形　態】 体長 5 ～ 6.5mm、前胸中央部に切れ込みがないのが日本産同属他種との違い。

【国内分布】 北海道、本州

【主な生息環境】 平地の雑木林など。カミキリムシの脱出孔に営巣し、キモグリバエ科、クロキノコバエ科、ハモグリバエ科などの小型のハエを狩ることから、スギの丸太が放置されていたりする平地林が本種生息の条件となる。

【県内での生息状況】 1964 ～ 1972 年にかけて、小川町、寄居町、旧児玉町（現本庄市）などで少数が記録されているのみである。

【特記事項】 日本固有種である。育室はカミキリムシが出した木屑で仕切り、入口はスギのヤニで封じる。日本産ギングチバチでヤニを使うのは本種のみである。栃木県で絶滅危惧Ⅰ類に指定される。

科　名　ギングチバチ科
〔和　名〕 **ニッポントゲアワフキバチ**
〔学　名〕 *Argogorytes nipponis* Tsuneki

埼玉県(2018) EN　環境省(2015) DD
指定状況 －

【形　態】 体長 10 ～ 13mm、前胸背板に黄帯がある。尾域が細舌状で光沢があり、無毛である。

【国内分布】 北海道、本州、四国、九州

【主な生息環境】 山麓の里山。アワフキムシの幼虫を狩り、巣の育房に 9 ～ 17 頭を蓄える。椎茸のホダ木などの不朽した材に穴を掘って営巣することから、程よい不朽木の存在が必要である。

【県内での生息状況】 旧児玉町（現本庄市）、寄居町、旧両神村（現小鹿野町）の両神山麓などで得られている。

【特記事項】 巣は分枝坑で、育房を木屑で仕切る。近県では群馬県と千葉県で絶滅危惧Ⅱ類に指定されている。前版での和名はニッポンアワフキバチ、ドロバチモドキ科とされた。

科　名　スズメバチ科
〔和　名〕 **ヤマトアシナガバチ**
〔学　名〕 *Polistes japonicus japonicus* Saussure

埼玉県(2018) EN　環境省(2015) DD
指定状況 －

【形　態】 体長はメス 16 ～ 22mm、巣の繭は緑がかった黄色である。

【国内分布】 本州、四国、九州、対馬

【主な生息環境】 平地から台地、丘陵地帯。主に里山環境で、平地では人家の軒下や壁などにも営巣する。

【県内での生息状況】 1950 から 1960 年代に長瀞町等で採集されて以来記録されていない。かつては全県的に人家付近に見られたという。

【特記事項】 かつては埼玉県では普通種であったが、近年見られない。この状況は、近隣都県で共通している。近県ランク　群馬県：絶滅危惧Ⅰ類、栃木県：絶滅危惧ⅠA、神奈川県：Ⅱ類、東京都：情報不足。

科　名　ギングチバチ科
〔和　名〕**オオグシヒメアナバチ**
〔学　名〕*Nitela* (*Nitela*) *ohgushii* Tsuneki

埼玉県(2018)　VU　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　態】体長 4.4 ～ 4.6mm、黒色で、単眼は二等辺三角形型に配置。腹部の光沢は弱い。

【国内分布】北海道、本州、九州

【主な生息環境】古い神社の柱の木に開いた虫穴に営巣し、木屑で仕切って利用する。柱の上などを足早に歩行する行動が見られる。

【県内での生息状況】1968 年に神川町、1973 年に本庄市、その後、戸田市で採集されている。

【特記事項】チャタテムシを狩り巣に運び込む。
前版での和名はオオグシニテラバチ。

科　名　ギングチバチ科
〔和　名〕**ニッポントゲアナバチ**
〔学　名〕*Oxybelus nipponicus* Tsuneki

埼玉県(2018)　VU　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　態】体長 メス 5 ～ 6mm、オス 4 ～ 5mm、全身が黒く、腹部に横紋対を持つ。メスの腹部末節は赤みがかる。

【国内分布】本州

【主な生息環境】砂地に営巣する。深さ 6 ～ 10cm の穴を掘って 1 つの育房を作り、ハナバエやユスリカなど小型ハエ目を狩るため、生息にはこれらを満たす条件が必要となるが、全国的にも少ないことから他の要因もあると考えられる。

【県内での生息状況】記録は少ないが、長瀞町、加須市、戸田市と県内では広い範囲で採集されている。

【特記事項】

科　名　ギングチバチ科
〔和　名〕**ガロアギングチ**
〔学　名〕*Crossocerus* (*Blepharipus*) *heydeni* Kohl

埼玉県(2018)　VU　環境省(2015)　DD
指定状況　－

【形　態】体長 5 ～ 6.7mm、腹部第 2 節の大半が赤いのが本種の特徴である。

【国内分布】本州、四国

【主な生息環境】キノコバエを狩るとされるが、詳しい習性は不明である。キノコバエが生息できる原生林のような環境が必要であるとが考えられる。

【県内での生息状況】旧大滝村（現秩父市）の太陽寺、雁坂峠への登山道、大血川東谷などで採集されているが、稀である。

【特記事項】ムロタギングチ、ニッポンギングチは同物異名である。

科　名　ギングチバチ科
〔和　名〕**スギハラギングチ**
〔学　名〕*Crossocerus* (*Blepharipus*) *styrius* Kohl

埼玉県(2018)　VU　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　態】体長 6 ～ 6.5mm、全身が黒く、脚も黒が主体。後脛節が明らかに球棍状となる。

【国内分布】北海道、本州、四国、九州

【主な生息環境】山地の登山道脇などで採集されることから、原生林に生息すると考えられる。

【県内での生息状況】旧大滝村（現秩父市）の雁坂峠への登山道で、わずかに得られたのみである。

【特記事項】習性は未知である。ミツバギングチは本種の同物異名。

科　名　ギングチバチ科
〔和　名〕 **オオギングチ**
〔学　名〕 *Ectemnius* (*Metacrabro*) *fossorius konowi* (Kohl)

埼玉県(2018)　VU　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　　態】 体長はメス 14 ～ 20mm、オス 10 ～ 15mm、腹部 2 ～ 4 節に黄斑が対である。大顎はメスが黒、オスは大部分が黄色。

【国内分布】 北海道、本州

【主な生息環境】 山地。周囲に原生林がある登山道などで見つかることから、原生林があることが生息環境として求められると言える。営巣は不朽が進んだ朽木で、アブやハエを狩ることから、これらの条件も生息環境に求められる。

【県内での生息状況】 1973 年に旧大滝村（現秩父市）雁坂峠への登山道でメス 1 頭、1974 年に中津川林道でオス 4 頭が記録されている。

【特記事項】 営巣する朽木は不朽が進んだ柔らかい物である。単純分岐の連鎖巣を作る。

科　名　ギングチバチ科
〔和　名〕 **ヘロスギングチ**
〔学　名〕 *Lestica* (*Solenius*) *heros* (Kohl)

埼玉県(2018)　VU　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　　態】 体長 15 ～ 18mm、大型種であり、かつ頭盾の毛は金色で、他種との区別は容易。

【国内分布】 北海道、本州、四国

【主な生息環境】 朽ちた倒木に穴を掘って巣を作るため、営巣に適した良好な状態の不朽倒木などがある森林環境が必要。

【県内での生息状況】 1954 年に旧大滝村（現秩父市）二瀬でメス 1 頭が採集されているだけである。

【特記事項】 本種が属するサメハダギングチ亜属ではガの成虫を狩るものが多い。本種はシャクガ類の成虫を狩った記録がある。

科　名　ドロバチモドキ科
〔和　名〕 **コイケアワフキバチ**
〔学　名〕 *Eogorytes fulvohirtus* (Tsuneki)

埼玉県(2018)　VU　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　　態】 体長 8 ～ 10mm、黒色で黄褐色毛が多く、腹部第 2 節は極端に大きく、後半に幅広の黄帯がある。

【国内分布】 本州、九州

【主な生息環境】 モンキアワフキを狩ることが知られている。その他の習性について詳細は不明だが、丘陵から山地にかけて生息すると考えられる。本州では埼玉県、福井県、静岡県などから得られる。

【県内での生息状況】 旧吉田町（現秩父市）、長瀞町の宝登山で得られているのみである。

【特記事項】

科　名　ヒメハナバチ科
〔和　名〕 **ミカドヒメハナバチ**
〔学　名〕 *Andrena* (*Andrena*) *mikado* Strand et Yasumatsu

埼玉県(2018)　VU　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　　態】 体長メス 13 ～ 15mm、オス 10 ～ 11mm、日本産ヒメハナバチ科で最大種。メスの体毛は長く色は変化に富む。

【国内分布】 本州、四国、九州

【主な生息環境】 3 月から 5 月にかけて成虫が出現する。平地からは記録されておらず、丘陵地から山地で採集される。森林の発達した山地が主な生息環境である。地中に穴を掘って営巣し、花粉を貯蔵する。

【県内での生息状況】 旧大滝村（現秩父市）、旧荒川村（現秩父市）、秩父市の熊倉山、飯能市の天覧山での記録があるのみである。

【特記事項】 日本固有種である。

科　名　ハキリバチ科
〔和　名〕**フルカワフトハキリバチ**
〔学　名〕*Megachile lagopoda furukawai* Yasumatsu

埼玉県(2018) VU　環境省(2015) DD
指定状況 －

【形　態】体長メス 15 ～ 19mm、オス 14 ～ 18mm、大型のハキリバチ。脚の腿節が太く、がっちりした印象。

【国内分布】北海道、本州（北部と西部）、九州

【主な生息環境】生態は不明であるが、7 月から 8 月にかけて成虫が出現する。クサフジやラベンダー、ゴマ、キキョウに訪花することが知られる。草原性と考えられている。他のハキリバチと同様に、竹筒や地中の穴に営巣し、切り取ってきた葉で巣房を作って、花粉を蓄えて産卵すると思われる。

【県内での生息状況】小川町のみで採集されている。

【特記事項】1930 年に栃木県で得られたメスをもとに種記載されたが、栃木県では現在は絶滅しているとされる。

科　名　ギングチバチ科
〔和　名〕**サッポロジガバチモドキ**
〔学　名〕*Trypoxylon* (*Trypoxylon*) *sapporoense* Tsuneki

埼玉県(2018) NT1　環境省(2015) －
指定状況 －

【形　態】体長 8 ～ 10mm、腹部第 1 節は棍棒状でやや長い。類似種が多く、注意が必要。

【国内分布】北海道、本州

【主な生息環境】丘陵から山地にかけて分布。習性が未知であるため、詳細な生息環境は不明。本州では埼玉県、福井県、神奈川県、山梨県から発見されている。

【県内での生息状況】旧吉田町（現秩父市）で採集（南部 , 1972）されて以来、寄居町、越生町、日高市から記録されているが、いずれも 1 頭ずつの採集にとどまっている。

【特記事項】

科　名　ギングチバチ科
〔和　名〕**サッポロギングチ**
〔学　名〕*Crossocerus* (*Cuphopterus*) *dimidiatus sapporoensis* (Kohl)

埼玉県(2018) NT1　環境省(2015) －
指定状況 －

【形　態】体長 7 ～ 8.5mm、腹部第一背板に一対の縦長紋があり、第 3、6、7 節背板に黄紋がある。

【国内分布】北海道、本州

【主な生息環境】亜高山帯に生息する。本種は不朽材や土中に穴を掘って多房巣を作って、イエバエ、ハナバエなどを狩ることから、それらの存在が必要となる。福島県、栃木県、埼玉県、新潟県、石川県、福井県で記録される。

【県内での生息状況】旧大滝村（現秩父市）の雁坂峠、三国峠、両神山などの高地のみで採集される。

【特記事項】

科　名　ギングチバチ科
〔和　名〕**ワタナベギングチ**
〔学　名〕*Rhopalum* (*Calceorhopalum*) *watanabei* Tsuneki

埼玉県(2018) NT1　環境省(2015) －
指定状況 －

【形　態】体長 5 ～ 6mm、黒色。前中脚は黄褐色が主で後脚は黒。触角は 1 ～ 6 節が黄白色で 5 ～ 6 節に黒帯がある。

【国内分布】北海道、本州、四国、九州

【主な生息環境】低山から山地の周囲の自然度が高い森林の林道で得られている。

【県内での生息状況】小川町でオス 1 頭が得られている。

【特記事項】千島・台湾・サハリンにも分布する。日本の個体群は名義タイプ亜種とされる。

科　名　ギングチバチ科
〔和　名〕 **ムネアカツヤアナバチ**
〔学　名〕 *Alysson pertheesi* Gorski

埼玉県(2018) NT1　環境省(2015) －
指定状況 －

【形　態】 体長 5 ～ 7mm、体色は黒く、メスの前伸腹節から腹部第 1 節にかけて黄赤色。
【国内分布】 本州
【主な生息環境】 河川敷で得られている。中州など細かい砂が溜まった裸地にに営巣し、草が茂るといなくなる。撹乱されやすい環境であることから営巣地は頻繁に変わる。栃木県、埼玉県から得られる。
【県内での生息状況】 長瀞町、寄居町、熊谷市、戸田市から記録されており、いずれも荒川の河川敷に生息していた。
【特記事項】 砂地に直径 2mm 深さ 10cm ほどの穴を掘り、ヨコバイ科、ヒロズヨコバイ科、ホシヨコバイ科の若虫を狩る。

科　名　フシダカバチ科
〔和　名〕 **キスジツチスガリ**
〔学　名〕 *Cerceris arenaria yanoi* (Linnaeus)

埼玉県(2018) NT1　環境省(2015) －
指定状況 －

【形　態】 体長 10 ～ 15mm、体は黒、腹部第 1 節には 1 対の黄斑、2 ～ 6 節背板後縁に黄色帯がある。
【国内分布】 北海道、本州、四国、九州
【主な生息環境】 河川敷や海岸などの砂地。地面に深さ 30cm 以上の穴を掘って営巣する。砂地に生息するヒョウタンゾウムシ類の成虫を狩ることから、しっかりとした砂地と草地が生息に必要な条件となる。
【県内での生息状況】 幸手市の江戸川沿いでのみ営巣地が見つかっている。
【特記事項】 巣は多房巣構造である。

科　名　ケアシハナバチ科
〔和　名〕 **シロスジフデアシハナバチ**
〔学　名〕 *Dasypoda* (*Dasypoda*) *japonica* Cockerell

埼玉県(2018) NT1　環境省(2015) －
指定状況 －

【形　態】 体長メス 13mm、オス 12mm、後脚に長い刷毛、腹部第 2 ～ 4 節背板後縁の白色毛が白いスジに見える。
【国内分布】 北海道、本州、九州
【主な生息環境】 関東では平地の畑などの裸地か、荒い芝草が茂る半裸地の地面に穴を掘って営巣する。巣は隣接した集団となる。成虫が活動するのは、平地の背の高い草原で主にアキノノゲシを訪花する。成虫の出現時期は 8 ～ 11 月。
【県内での生息状況】 幸手市の 1 ヶ所からメス 2 頭が得られているのみである。限られた所に集団営巣地を作るため、開発による影響が心配される。
【特記事項】 栃木県では準絶滅危惧に指定されている。幼虫の餌となる花粉団子は、底面に 3 つの小突起があり育室床との接触面積が少ない。

科　名　ツチバチ科
〔和　名〕 **オオハラナガツチバチ**
〔学　名〕 *Megacampsomeris grossa* (Fabricius)

埼玉県(2018) NT2　環境省(2015) －
指定状況 －

【形　態】 体長メス 25 ～ 30mm、オス 20 ～ 32mm、頭・胸部に黄褐色の長毛。腹部は黒くメス 1 ～ 3 節、オス 1 ～ 5 節に白毛の帯がある。
【国内分布】 本州、四国、九州、南西諸島
【主な生息環境】 広い河川敷や草地、畑地など、台地から丘陵地にかけて生息する。様々な花を訪れる。ツチバチ科はコガネムシ類の幼虫に外部寄生することから、それらの生息場所である草地の存在が必要と考えられる。夏から秋にかけて出現する。
【県内での生息状況】 過去には県内の台地、丘陵帯での記録がある。2015、2016 年に熊谷市大麻生の畑で採集されている。
【特記事項】 コガネムシの幼虫に外部寄生すると思われる。本種の生息には大型コガネムシの生息が可能な環境が必要となる。

科　名　クモバチ科（ベッコウバチ科）
〔和　名〕 **ヒラカタクモバチ**
〔学　名〕 *Aporus japonicus* Yasumatsu et Torikata

埼玉県(2018)　NT2　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　態】 体長メス 8 ～ 13.5mm、オス 6 ～ 10mm、黒色で、銅色の微毛が密生する。

【国内分布】 本州、四国、九州

【主な生息環境】 狩りの対象となるとされるトタテグモが生息するところが本種の生息環境となる。トタテグモは地中の穴に蓋をして潜むため、地表付近を徘徊する。

【県内での生息状況】 寄居町で採集されている。

【特記事項】 本州、九州に分布するが少ない。
前版での和名はヒラカタベッコウ。

科　名　ドロバチ科
〔和　名〕 **クチビロハムシドロバチ**
〔学　名〕 *Symmorphus decens* (Kostylev)

埼玉県(2018)　NT2　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　態】 体長メス 9.5 ～ 11.5mm、オス 9mm、頭盾が幅広い。

【国内分布】 本州、四国、九州

【主な生息環境】 カヤぶき屋根や、柱の虫くい穴などに営巣し、フジハムシの老熟幼虫を狩ることから、丘陵地帯を中心とした古い家屋など。

【県内での生息状況】 旧児玉町（現本庄市）、神川町、長瀞町の宝登山、秩父市の浦山川等で採集されているが少なく、近年減少している。

【特記事項】 麦わらやカヤぶきの屋根材に営巣することが多いが、こういった家屋は少なくなっているため、減少が著しいと考えられる。

科　名　スズメバチ科
〔和　名〕 **ニッポンホオナガスズメバチ**
〔学　名〕 *Dolichovespula saxonica nipponica* Sk.Yamane

埼玉県(2018)　NT2　環境省(2015)　DD
指定状況　－

【形　態】 体長 女王 16 ～ 18mm，ワーカー 11 ～ 14mm。

【国内分布】 北海道、本州

【主な生息環境】 山地帯の建物の軒下や枝先など開放空間に営巣するが、時折、樹洞や壁の隙間などの閉鎖空間にも営巣する。

【県内での生息状況】 秩父市で記録がある。

【特記事項】 樹枝や建物の軒先の開放空間からまれに土中など閉鎖空間に営巣する。ホオナガスズメバチ類の巣は、柔軟な和紙状の壁からでき、営巣末期には巣房数が 2,000 程度となる。

科　名　アリマキバチ科
〔和　名〕 **ワモンイスカバチ**
〔学　名〕 *Passaloecus nipponicola* Tsuneki

埼玉県(2018)　NT2　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　態】 体長メス 5mm、オス 4 ～ 4.5mm、オスの触角 2 ～ 12 節に黄褐色の輪状紋。脚は赤黄色。

【国内分布】 北海道、本州、四国

【主な生息環境】 山地の落葉広葉樹を中心とした森林で、林床にササが茂る環境。

【県内での生息状況】 秩父市（浦山口、大血川上流、旧大滝村の太陽寺）から記録されている。

【特記事項】 細いササの茎の中空部に営巣する。透明な樹脂で仕切って複数育房を作り、アブラムシを狩り 1 室に 30 ～ 40 頭ほど蓄える。

科　名　ギングチバチ科
〔和　名〕 **ニッポンハヤバチ**
〔学　名〕 *Tachytes etruscus* (Rossi)

埼玉県(2018) NT2　環境省(2015) －
指定状況 －

【形　態】 体長 12 ～ 18mm、頭と胸は黄褐色の毛で覆われ腹部には 4 本の銀白色毛帯。脚は黒く付節が淡色。

【国内分布】 本州、九州

【主な生息環境】 砂地に穴を掘って、営巣すると考えられているため、河川敷や自然堤防など砂地を好むと思われる。また、実際そのような場所で採集されている。

【県内での生息状況】 戸田市の荒川河川敷、幸手市の中川近辺の自然堤防などの砂地で採集されている。

【特記事項】 直翅類を狩るとされるが、正式な記録はない。

科　名　ギングチバチ科
〔和　名〕 **ナンブジガバチモドキ**
〔学　名〕 *Trypoxylon* (*Trypoxylon*) *nambui* Tsuneki

埼玉県(2018) NT2　環境省(2015) －
指定状況 －

【形　態】 体長メス 5 ～ 6mm、オス 4 ～ 5mm、メスの腹部に赤色部があり、頭盾の前縁は 3 歯状となる。

【国内分布】 本州、四国

【主な生息環境】 低山から山地にかけての山際の周囲を林に囲まれた古い神社。建物の虫穴を利用して営巣する。狩りの対象がナンブコツブグモのみで、それらが生息できる湿度が保たれた環境。埼玉県、岩手県、宮城県、長野県、岐阜県、福井県、愛知県から得られている。

【県内での生息状況】 秩父市、皆野町、長瀞町、寄居町、小川町、飯能市、吉見町、旧児玉町（現本庄市）など県内では各地から見つかっている。

【特記事項】 埼玉県で初めて記録された。県外では稀な種。

科　名　ギングチバチ科
〔和　名〕 **シモヤマジガバチモドキ**
〔学　名〕 *Trypoxylon* (*Trypoxylon*) *shimoyamai* Tsuneki

埼玉県(2018) NT2　環境省(2015) －
指定状況 －

【形　態】 体長メス 9mm、オス 7mm。脚に黄色部があり黒い。触角間は低いコブ状隆起。頭盾前縁は 2 歯状。

【国内分布】 北海道、本州

【主な生息環境】 夏から秋にかけて、山間部の小屋や民家付近の薄暗い薪や竹置き場に生息する。竹筒や既存の穴を利用して営巣する。数個の独房を泥で仕切って作る。カニグモやハエトリグモを狩り幼虫の餌とする。本州からは青森県、福井県、石川県、山梨県、埼玉県より記録があるが少ない。

【県内での生息状況】 秩父市長尾根で 1974 年に採集されているのみである。

【特記事項】 本種の生息は、湿度や明るさなどわずかな環境変化の影響を受ける。

科　名　ギングチバチ科
〔和　名〕 **オタネギングチ**
〔学　名〕 *Crossocerus* (*Crossocerus*) *opacifrons* (Tsuneki)

埼玉県(2018) NT2　環境省(2015) －
指定状況 －

【形　態】 体長メス 5 ～ 6mm、黒色で大顎基部と肩板は黄色。メス脚にも黄色い部分がある。オス前脚と中脚のほとんどが黄色。

【国内分布】 北海道、本州、四国、九州

【主な生息環境】 明らかではないが、採集記録から平地の里山環境と思われる。営巣はやや湿った土に穴を掘り、小型のハエを狩るが、詳しい記録はない。寺のお堂の下に営巣した記録があるが、土質や湿り具合に好みの条件があるようである。

【県内での生息状況】 旧児玉町（現本庄市）、川越市で採集されている。

【特記事項】 栃木県で絶滅危惧Ⅱ類に指定されている。日本固有種である。

科　名　ギングチバチ科
〔和　名〕**キスケギングチ**
〔学　名〕*Rhopalum* (*Rhopalum*) *guttatum* Tsuneki

埼玉県(2018)　NT2　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　態】体長 4 ～ 4.5mm、黒色でメスの尾域は三角状で無光沢、中央線に向かい溝状に凹む。オスの触角第 3 ～ 5 節は他節より短い。

【国内分布】北海道、本州

【主な生息環境】古い神社の建物の柱にある甲虫の脱出口やカヤぶき屋根に営巣し、ユスリカ科などの成虫を狩ることから、周囲に自然が残された古い建物周辺で見られる。本州では青森県、福井県、埼玉県から記録される。北海道では 2008 年に平地である札幌市中島公園で生息が確認されている。

【県内での生息状況】1966 ～ 1968 年にかけて長瀞町の宝登山神社で採集されている。

【特記事項】

科　名　ギングチバチ科
〔和　名〕**コシジロギングチ**
〔学　名〕*Rhopalum succineicollarum* Tsuneki

埼玉県(2018)　NT2　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　態】体長 7 ～ 8mm、頭部、胸部は黒。頭盾先端は黄褐色。腹柄の基半分はメス黄白色、オス黄褐色。

【国内分布】北海道、本州、四国、九州、対馬

【主な生息環境】低山から山地にかけて生息し、古い建物にできた甲虫が作った穴やカヤぶき屋根のカヤの随に営巣し、チャタテムシを狩る。

【県内での生息状況】1968 年に長瀞町の宝登山、1973 年に旧大滝村（現秩父市）入川と、突出峠 - 水場で得られた記録があるが、少ない。

【特記事項】巣の 1 室に狩ったチャタテムシを 19 ～ 24 頭入れる。

科　名　ヒメハナバチ科
〔和　名〕**トゲアシヒメハナバチ**
〔学　名〕*Andrena* (*Chlorandrena*) *taraxaci orienticola* Stand

埼玉県(2018)　NT2　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　態】体長メス 10mm、オス 8mm、頭盾がサメ肌状で荒い点刻が蜜にある。

【国内分布】本州、四国、九州

【主な生息環境】カントウタンポポやジシバリ、ノゲシを訪花する。畑などの裸地の地面に穴を掘って営巣する。平地の春に出現する。

【県内での生息状況】所沢市でメス 1 頭が得られている。

【特記事項】地中に穴を掘って営巣する。花粉を蓄えて幼虫の餌とする。

科　名　ハキリバチ科
〔和　名〕**キョウトキヌゲハキリバチ**
〔学　名〕*Megachile* (*Eutricharaea*) *kyotensis* Alfken

埼玉県(2018)　NT2　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　態】体長メス 9mm、オス 8mm。

【国内分布】本州、四国、九州

【主な生息環境】丘陵地の雑木林などの林縁部や伐採地、休閑地など。草の少ない露出した地面に穴を掘って営巣する。8 月から 9 月にかけて出現し、ハギやミソハギなどを訪花する。

【県内での生息状況】滑川町の武蔵丘陵森林公園、越生町、鶴ケ島市、嵐山町、長瀞町などで採集されている。

【特記事項】竹筒や地中などの既存の穴に営巣する。葉を切ってツボを作り、花粉を蓄えると考えられている。前版での和名はキョウトハキリバチ。

科　名　ミツバチ科

〔和　名〕 **クロマルハナバチ**

〔学　名〕 *Bombus* (*Bombus*) *ignitus* Smith

埼玉県(2018) DD　環境省(2015) NT

指定状況 －

【形　態】 体長女王 20 ～ 23mm、働き蜂 11 ～ 19mm、オス 14 ～ 19mm、体毛が刈り揃えたよう。メスはツヤのある黒色で腹部第 4 節以降は橙色。

【国内分布】 本州、四国、九州（北部）

【主な生息環境】 暖地性で、丘陵地から山地に生息する。4 月から 11 月にかけての活動期間を通じて、途切れずに開花植物があることが重要。また、営巣は森林の地中にあるノネズミの穴を利用するため、それらの生息できる環境が必要である。

【県内での生息状況】 寄居町、長瀞町、秩父市の三峰山、雲取山から得られている。

【特記事項】 かつては神奈川県で絶滅とされるなど、各地で減少が指摘されたが、近年ではハウス栽培の作物の受粉交配に利用されており、逸出の可能性も考えられ、今後見守る必要がある。

科　名　ミツバチ科

〔和　名〕 **ナガマルハナバチ**

〔学　名〕 *Bombus* (*Megabombus*) *consobrinus* Dahlbom

埼玉県(2018) DD　環境省(2015) DD

指定状況 －

【形　態】 体長女王 18 ～ 22mm、働き蜂 11 ～ 18mm、オス 14 ～ 20mm。

【国内分布】 本州

【主な生息環境】 東北南部から中部山岳地帯にかけての標高 1,500m 以上の限られた地域で、地中にある穴に小さなコロニーを作る。4 月下旬から 11 月にかかる営巣期間を通じて途切れることなく植物の開花が必要である。

【県内での生息状況】 旧大滝村（現秩父市）の太陽寺で採集されている。ニホンジカの増加により、亜高山帯から山地にかけての森林の下草や草地が喪失したり、植生が単純化しており、社会性ハナバチ類の生息が脅かされていると考えられる。県内では古い記録しかなく、継続して動向を見守る必要がある。

【特記事項】 近県ランク　群馬県：絶滅危惧Ⅱ類、長野県：情報不足。

科　名　アリ科

〔和　名〕 **マナヅルウロコアリ**

〔学　名〕 *Pyramica masukoi* (Ogata et Onoyama)

埼玉県(2018) LP　環境省(2015) －

指定状況 －

【形　態】 働きアリの体長 1.5mm。

【国内分布】 本州

【主な生息環境】 照葉樹林の林床の土中に営巣する。埼玉県、茨城県、神奈川県、広島県から得られているのみである。

【県内での生息状況】 小川町の林床の落ち葉の下から 1 個体が得られただけである。

【特記事項】 以前はノコバウロコアリ属の *Strumigenys matukoi* とされていた。近似種に比べると頭部が縦に長い。照葉樹林が本種の生息環境として必要と考えられる。

科　名　セイボウ科

〔和　名〕 **フタツバトゲセイボウ**

〔学　名〕 *Elampus bidens tristis* Tsuneki

埼玉県(2018) LP　環境省(2015) －

指定状況 －

【形　態】 体長 7 ～ 9mm、体色は黒から青黒色。小楯板に突起がある。

【国内分布】 北海道、本州、四国、九州

【主な生息環境】 山地の林に見られる。低木の葉上から得られることが多い。ハチに寄生すると思われるが、寄主は明らかでない。

【県内での生息状況】 小川町で 1 頭が採集されたのみである。

【特記事項】 地中営巣性のアナバチ類やギングチバチ類に寄生すると思われるが、寄主を含めた生態は不明である。

科　名　クモバチ科（ベッコウバチ科）
〔和　名〕 **スギハラクモバチ**
〔学　名〕 *Leptodialepis sugiharai* (Uchida)

埼玉県(2018)　LP　環境省(2015)　DD
指定状況　－

【形　態】 体長メス 19 ～ 28mm、オス 13 ～ 21mm、黒色、顔面から前胸背面にかけて黄色部分が目立つ。翅は橙黄色。

【国内分布】 本州、四国、九州、南西諸島

【主な生息環境】 山寄りの丘陵地帯で見られる。営巣場所となる不朽材があり、狩りの対象となる大型のクモが生息することが生息の条件となる。

【県内での生息状況】 小川町と嵐山町で、それぞれメス 1 頭が採集されている。

【特記事項】 アシダカグモやコアシダカグモなど大型の徘徊性クモを狩り、不朽材に穴を掘って多房巣を作る。前版での和名はスギハラベッコウ。

科　名　クモバチ科（ベッコウバチ科）
〔和　名〕 **アオスジクモバチ**
〔学　名〕 *Paracyphononyx alienus* (Smith)

埼玉県(2018)　LP　環境省(2015)　DD
指定状況　－

【形　態】 体長メス 11 ～ 14mm、オス 10mm、腹部が空色に見えるのが特徴。

【国内分布】 本州、四国、九州、伊豆諸島

【主な生息環境】 海岸から丘陵地帯の河川などの砂地に営巣する。

【県内での生息状況】 本庄市と嵐山町でのみ採集された。

【特記事項】 徘徊性であるハラクロコモリグモを狩り、地中に営巣することが明らかになった。ヤマトアオスジクモバチ（ヤマトアオスジベッコウ）とも呼ばれる。
前版での和名はアオスジベッコウ。

科　名　ギングチバチ科
〔和　名〕 **アギトギングチ**
〔学　名〕 *Ectemnius* (*Yanonis*) *martjanowii* (F.Morawitz)

埼玉県(2018)　LP　環境省(2015)　DD
指定状況　－

【形　態】 体長メス 12 ～ 17mm、オス 10 ～ 16mm、オスは大型になるほど顕著な下顎突起を持ち、大顎が伸長する。

【国内分布】 本州

【主な生息環境】 成虫は本州の東北部から中部の標高 1,000m を超える山岳地帯に、7 月から 9 月にかけて出現する。

【県内での生息状況】 旧大滝村（現秩父市）雁坂峠 – 甲武信ヶ岳など県境尾根などで得られている。

【特記事項】 生態は未解明である。